

き

き

が

き

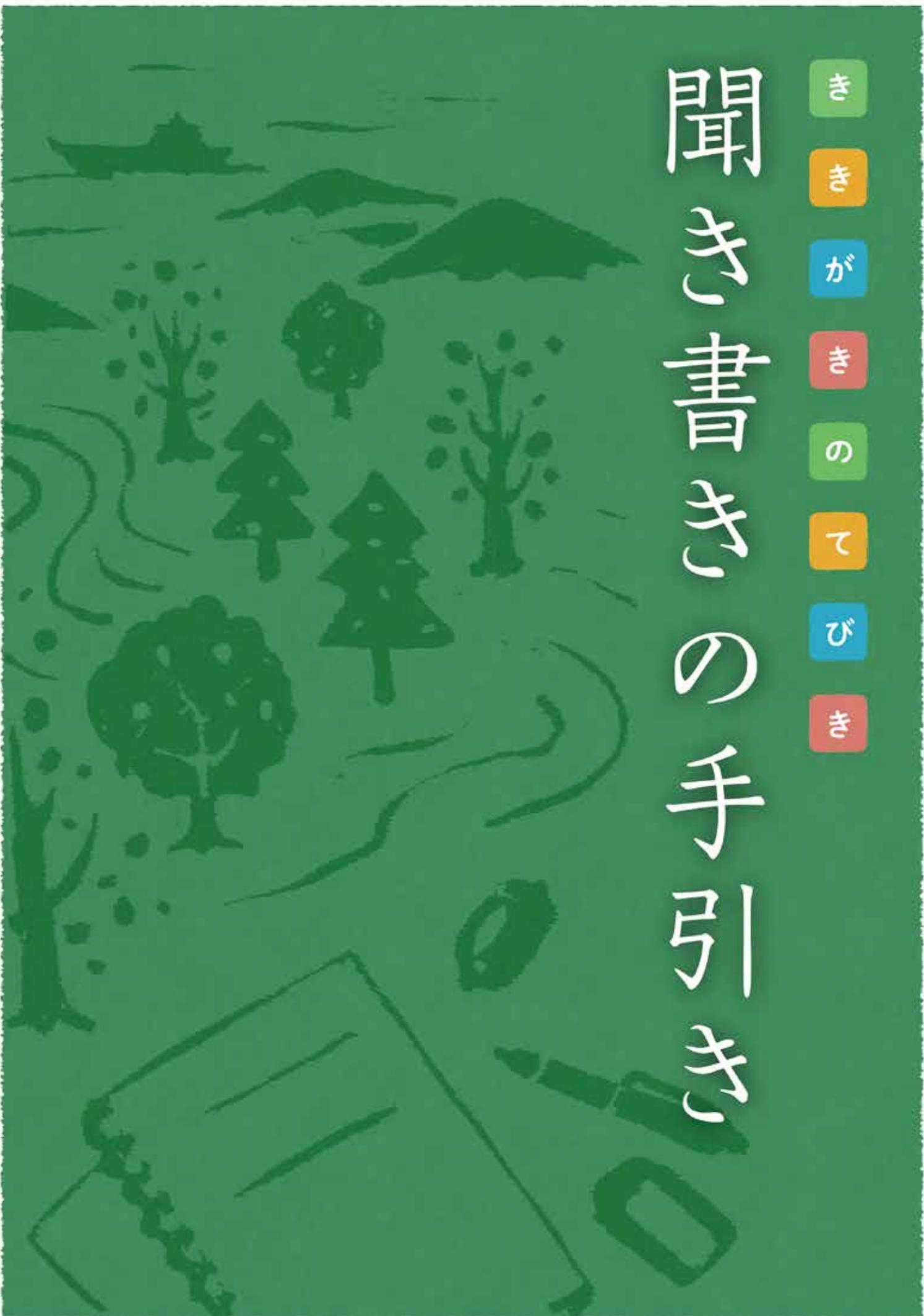
の

て

び

き

聞き書きの手引き



聞き書きの手引き・目次

はじめに	2
聞き書き甲子園 開催スケジュール	5
聞き書きの心得	6
聞き書きをしてみよう	8
塩野米松流「聞き書き術」	18
聞き書き作品例	29

はじめに

日本は森の国

日本は、面積の約7割が森林で、周囲を海に囲まれた島国です。温暖かつ湿潤な気候で、四季の変化に富み、多くの動物や植物が生息しています。私たち日本人は遥か昔から、その自然と風土に適した暮らしや文化を育んできました。

日本の伝統的な家屋は、木と土からできています。家具や食器などの道具も、その多くは木や竹を材料にして作りました。植物の繊維は、糸に紡いで布を織りました。煮炊きをするにも、暖をとるにも、木（薪や炭）は欠かすことのできないものでしたし、下草や落ち葉は堆肥となって、田畑の実りを約束してくれました。

私たち日本人が生き続けることができたのは、日本列島に豊かな森があり、その森を最大限に活用する知恵や技術の集積があったからにほかなりません。一方で、森もまた、人が木を伐り、適度に手を入れることによって、太陽の光が入り、その多様性が維持されてきたのです。森に降った雨や雪は、地中にしみ込んで地下水となり、やがてミネラル豊富な湧き水になります。河川などを通じて海に流れ込んだその水は、海洋生物の成長に必要な栄養分も補給しています。日本列島は、世界でも稀に見る生物多様性の豊かな地域なのです。

ところが高度経済成長期以後、日本人の暮らしは大きく変化しました。町にはコンクリートのビルが立ち並び、身の回りにはプラスチック製品があふれるようになりました。モータリゼーションの発達と燃料革命により、私たちの生活は、石油や石炭などの化石燃料に依存するようになったのです。

大量生産、大量消費、大量廃棄を前提とした暮らしは、温室効果ガスを大量に放出します。そして森林破壊や海洋プラスチックごみの流出など、深刻な環境問題も引き起こしました。地球温暖化や気候変動、環境問題などの要因は、実は人類の活動そのものにあり、現代の社会経済システムやライフスタイルは「持続不可能」ではないかと、多くの人が気づきはじめています。

いま一度、私たち日本の歴史を振り返ってみましょう。私たちの暮らしが大きく変化したのは、1960年代の高度経済成長期です。農山漁村の暮らしも、その頃を境に大きく変化しました。しかし、森や川、海とともにある暮らしの中には、今も、昔からの知恵や工夫が息づいています。森・川・海の「名人」を訪ね、じっくりと話を聞いてみましょう。遥か昔から、なぜ日本列島では人間が暮らし続けることができたのか。そこには、これからの持続可能な暮らしのヒントが隠されているのかもしれない。



「聞き書き」をしてみよう

「聞き書き甲子園」は、全国の高校生が、森・川・海の「名人」を訪ね、その知恵や^{わざ}技、心を「聞き書き」し、発信する活動です。名人の多くは、60歳以上のご高齢の方。その職種は造林手、炭焼き、木工職人、漁師、海女など、さまざまですが、共通することは、長年、自然の恵みを生かす仕事をし、その地域で暮らし続けてきたということです。

たとえば、同じ林業でも、育てる樹種は、その土地の自然条件によって異なります。一つ一つの作業を丁寧に聞くと、その地域ならではの知恵や工夫も浮かんでくるでしょう。

名人は、自然の恵みをいかに得て、どのように加工し、衣食住に利用してきたのか。将来にわたって、その恵みを持続可能に利用するためには、どのような配慮や工夫が必要なのか。一つ一つのことを具体的に知るためには、その「人」に聞くしかありません。

高校生は名人に、日々の仕事について話を聞いていきます。いつ、どこで作業をしているのか。それは、なぜ、どうしてなのかと質問は続きます。どれだけ丁寧に質問を重ねられるか。それによって、名人が話す内容は、その質も深さも変わってくるのです。

二人の対話は、すべて録音します。そして、その録音したデータを一言一句、書き起こします。録音したデータを再生しては止め、また、書き起こす。その過程で、高校生は名人の言葉を何度も反芻することになります。

作業途中で、うっかり聞き流していた大切な言葉に気づくこともあるでしょう。「これが名人の言いたいことだったのか」と、改めて思い至ることもあるかもしれません。書き起こしは、とても手間のかかる作業ですが、名人の言葉を心で感じ、お互いの思いを重ね合わせていく大切な時間なのです。



ある高校生は言いました。「名人の言いたいことが、いつの間にか、自分の言いたいことになってきた」。名人の発する言葉の力や間合い、その背景の微妙な心の動き。高校生は、それらを丸ごと受けとめながら、作品をまとめていきます。

唯一無二の人生を生きる

「聞き書き」の作品は、名人の一人語りのスタイルに仕上げます。名人独特の言い回しや方言も、そのまま活かします。それを読むと名人の語り口はもちろん、その人柄までもが伝わってくるような作品になります。

ある名人は、高校生が「聞き書き」した作品を読んで、「初めて、自分の人生も捨てたものではなかったと思えた」と語りました。

名人のモノづくりの姿勢に感動し、「身の回りのあらゆるモノが、いきもん（生き物）に見えてきた」と言う高校生もいました。

「100年先を考えて、木を植える」と語った名人の言葉から、「今日、明日のことしか考えていない自分」に気づき、「自分を変えたい」と真剣に考えた高校生もいます。

「森が泣いている」「ムラが寂しくなった」と語る、名人の言葉に心打たれて、「話を聞いただけで終わりにしたくない」と、地域で活動をはじめた高校生もいます。

名人の生き方、働き方を、ひとつの「鏡」として、あなたの将来を考えてみましょう。「今はまだ、何をしたいのかわからない」という人もたくさんいるでしょう。でも、もしかしたら名人の多くは、「自分が何をしたいのか」という以前に、日々生きるために必要なことを積み重ねてきた。五感を駆使しながら、先人からの知恵や技術を体得してきた。それが「働く」ということであり、「働く」ことそのものに喜びや幸せを感じてきたのかもしれない。

あなたにとっての幸せとは、何でしょうか。どうしたら、隣の人にも幸せにできるでしょうか。人は一人で生きていくことはできません。そして「聞き書き」は、耳と目と心で相手と繋がっていく、そんな活動です。「聞き書き」の活動によって自分なりの物差し（価値基準）をみつけて、一人一人が幸せな未来を目指し、生きていくことを願っています。

聞き書き甲子園 開催スケジュール

- ✓ **5月初旬** **参加高校生の募集開始**
 - ・全国の高校に募集要項とポスターを送付。
 - ・Webサイトも見てみよう。(http://www.kikigaki.net)
- ✓ **6月末** **応募申し込み締切**
 - ・参加申込書と応募動機の作文を事務局に提出。
- ✓ **7月下旬** **参加高校生決定**
 - ・選考によって、参加者を決定。
- ✓ **8月中旬** **聞き書き事前研修会（都内）**
 - ・全国から参加する高校生が一堂に集まり、「聞き書き」の手法を学ぶ。
 - ・それぞれが「聞き書き」する名人を決定。
 - ・先輩の体験談を聞いて、秋からの取材に備える。
- ✓ **8月下旬～11月** **聞き書き取材（原則として2回）**
 - ・「名人」に連絡し、取材する日時を決める。
 - ・「名人」を訪問し、インタビューをしよう
 - ・インタビューを録音したデータを書き起こしして、文章を整理し、作品にまとめる。
- ✓ **12月中旬** **聞き書き作品の提出**
 - ・完成した作品は、必ず、「名人」に確認しよう。
 - ・確認が終わった作品は、期日までに事務局に提出する。
- ✓ **3月中旬** **聞き書き甲子園フォーラム開催（都内）**
 - ・「聞き書き」の成果を発表するフォーラムに参加しよう。
 - ・「聞き書き」の体験を発表。優秀作品には大臣賞等を授与。
 - ・作品は、冊子に印刷し、インターネット上の「聞き書き電子図書館」でも公開。
- ✓ **4月以降** **「名人」を再訪しよう**
 - ・いつかまた「名人」を訪ねよう。取材した「名人」が住む地域（市町村等）で、発表会を開催する場合もある。

現場を歩く、本物を見る、その人があたためてきた言葉を聞く

仕事場を訪ね、土地や風土を感じ、そこに生きる知恵や技術を教わり、
その人の人生や価値観に触れる。
理解したい、知りたいと思っている人がいるから、名人は語り始める。

仕事を通じて、浮かび上がる人生

衣食住を満ちし、社会での役割を果たし、自らの価値観を育てながら、
人生のほとんどを費やすのが「仕事」。
その人の仕事を中心に、個の人生を見つめる。

その時代の、その人の言葉を聞く

話し言葉は、一人ひとりが生きてきた背景や個性を表す。
地域特有の方言、その時代、その職業ならではの言葉、
その人の語り口を大切にしよう。

文才ではなく、素直さと尊敬する気持ちが大切

「聞き書き」には、小説家の才能はいらない。
知りたいという好奇心、素直にわからないことを聞く勇氣、
相手を尊敬し、大切に思う気持ちがあればいい。

個の尊厳をみつめよう

人にはそれぞれ異なる人生があり、長い道のりを歩んできたからこそ
語れる言葉がある。社会や時代は人を埋没させてしまうが、
あなたが聞き出す人生は消えない。

「聞き書き」は、人との出会いからはじまる

まず初めに挨拶をしよう。まなざしを交わし、言葉を交わし、
なぜ、会いに来たのかを伝える。
まっすぐな真摯な態度で、あなたが向き合えば、
名人はきっと心を開いてくれる。

人生は一言では表現できない

「なぜ」「どうして」という疑問を大切にしよう。
質問の角度を変えながら、丁寧に話を掘り下げていけば、
それまで気づかなかった技術や行為の細部が見えてくる。
そして、その仕事や生き方の核心に近づく。

「話し手」と「聞き手」の想いが響き合って、ひとつになる

二人の「対話」はすべて録音し、一言一句を書き起こしていく。
その過程で名人への理解は、さらに深まるだろう。
あなたが名人に共感する気持ちが、作品を仕上げる原動力。

足し算はダメよ、引き算だけね。

「聞き書き」は「話し手」の言葉だけで文章をまとめる手法。
「聞き手」の感想や考察を添えて、作品をごまかすことはできない。
「話し手」の言葉の中から大切な部分を見極めて、不要な部分は削る。

「聞き手」によって「話し手」は輝きを増す

「話し手」は、「聞き手」の質問に応じて、異なる自分を見せてくれる。
同じ名人でも、「聞き手」が異なれば、違う作品が仕上がる。
それが「聞き書き」の面白さ。

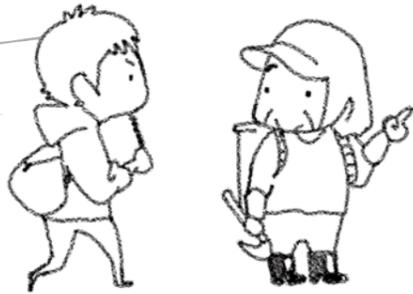
「話し手」と読者の仲介役はあなたです。

作品の編集は、読者が理解しやすいように整理するのが基本。
読者はあなたの作品を通じて、はじめて名人と出会う。
仲人役のあなたは、親切で気配り上手でなければならない。

「聞き書き」は、「話し手」と「聞き手」が共に創るもの

「聞き書き」は「話し手」と「聞き手」の二人三脚で成り立つもの。
名人との信頼関係を大切にしよう。
「ありがとう」を交わし終えたら、それはひとつのゴールです。

聞き書きをしてみよう



「聞き書き」の準備

1. 取材のテーマを確認

「聞き書き甲子園」は一人ひとりの対話によって、名人の人生（生きざま）を丸ごと受け止め、記録・発信する活動だ。一言で「人生」といっても、子どもの頃の話、家族のこと、趣味など、さまざまだが、「聞き書き甲子園」では、名人の「仕事」を中心に話を聞く。なぜならば、人生の大半は「働く」ことだからだ。

「働く」とは、文字とおり、体を動かすこと。衣食住のすべてをまかなうために、人は「仕事」をする。それは、世の中のために役立つことであり、人は「働く」ことを通して成長する。「働く」ことはまた、自然の恵みを利用しながら生きていることでもある。森・川・海の名人は、自然に熟知し、その変化にも敏感だ。その「仕事」には、先人の知恵や技術、心が受け継がれている。名人の「仕事」について、丁寧に話を聞いて、その人生（生きざま）を作品にまとめよう。

2. 取材のアポイントを取る

名人は、森・川・海の仕事を経年続けてきた熟練者だ。その職種は、樵（きこり）、炭焼き、木工職人、きのこや木の実の採取、漁師、海女、大工など多種多様で、活躍する地域もさまざま。取材する「名人」が決まったら、早速、電話をして、取材の申し込みをしよう。「名人」には、ご高齢の方もいるので、電話をするときは、ゆっくりと大きな声で話をしよう。



①まず、自己紹介をする

「はじめまして。〇〇学校〇年の〇〇です。このたび、〇〇さんに取材をさせていただきたく、ご連絡いたしました」

②取材の趣旨や目的を伝える

「私は、〇〇の活動に参加しています。「〇〇さんのお仕事」について、取材させていただきます」

③取材日を相談する

「〇月〇日の午後に取材をさせていただきたいのですが、ご都合はいかがでしょうか」



④取材する場所を確認する

〇〇さんのご自宅（あるいは仕事場）でお話を伺いたいのですが、よろしいでしょうか
「最寄駅はどこですか。〇時に駅で待ち合わせをさせていただいてもいいですか」

⑤最後にお互いの連絡先や目印を確認する

「私の携帯電話の番号は、〇〇〇〇です。よろしければ、携帯の連絡先を教えてください」
「当日は、白いTシャツに、リュックを持って伺います」



3. 質問表をつくる

名人のプロフィールを参考に、名人の仕事内容（作業工程、道具、特徴など）や、住んでいる地域について調べよう。

それをもとに、具体的な質問を考え、箇条書きのメモをつくろう。

質問する内容

トピック	質問例
基本情報	お名前、年齢、生年月日、出身地、家族構成、名人の職業、現在住んでいる地域（人口、気候風土、特色）など
子ども～青年期	生い立ち、学校で学んだこと、技術の習得など
仕事の内容	作業工程（段取りや手順、一日の流れ、年間の作業内容など）、仕事場、使う材料（原料）、道具、仕事のコツや工夫など

※ 「いつ」「どこで」「誰が」「何を」「どのように」「なぜ」という5W1Hを意識しながら質問を考えよう。

※ 質問表は、インタビューの心覚えとして手元に準備する。名人にインタビューするときには、質問表に沿って一問一答式で話を聞くのではなく、名人としっかり向き合って対話し、より深く、丁寧に聞いていくことが大切だ。

4. 持ち物の準備

録音機やカメラは、事前に、操作方法をよく確認してから持参しよう。

- 録音機（ICレコーダーなど）
- カメラ
- 予備バッテリーや充電機
- ノートと筆記用具
- 名人の連絡先（住所や電話番号）



「聞き書き」の当日



1. はじめに話すこと

名人のご自宅（ないし仕事場）を訪問したら、取材をはじめる前に、きちんと挨拶をして、自己紹介をしよう。「聞き書き」の趣旨を説明し、録音や写真をとることの了承を得てから、インタビューをはじめる。

①まず、自己紹介をする

「はじめまして。〇〇学校〇年の〇〇です。今日はお時間をいただき、ありがとうございます」

②取材の趣旨や目的を伝える

「私は〇〇の活動に参加しています。『〇〇さんのお仕事』について、今日はお話をお聞かせください」

③録音や写真をとることの了承を得る

「インタビューした内容は、〇〇さんの語り口調をそのまま生かした文章にまとめます。そのため、お話を録音させていただき、あとで書き起こしたいのですが、よろしいでしょうか？」

※「聞き書き作品」の見本になる資料があれば、それを見せて説明しよう。

④作品は印刷すること、印刷前に内容を確認いただくことを伝える

「できあがった作品は、印刷して冊子にしますので、作品ができあがりましたら、内容に間違いがないかどうか、確認してください。印刷した冊子は後日、お送りします」

2. インタビューする場所と時間

できるだけ静かな、落ち着いた場所でインタビューをしよう。録音機は名人の近くに置いて、マイク（機種によって本体に内蔵されているタイプと、外付けの場合がある）を、名人の側に向ける。録音機の下にハンカチを敷くと、机から伝わる振動音などのノイズを低減できる。

長い時間、話すと、名人も疲れるので、ときどき休憩をとろう。話の内容に応じて、作業場や道具、資料なども見せてもらおうと、理解が深まる。

3. 取材の心得

インタビューは、名人のお名前、年齢、生年月日、出身地、家族構成、職業、現在住んでいる地域のことなど、基本的なことを確認してから、本題に入ろう。聞き書きは一問一答式のインタビューではなく、名人と対話し、丁寧に質問を重ねながら聞くことが大切。わからないことは積極的に質問しよう。

話を聞く姿勢を大事にしよう

- ・名人を尊敬し、謙虚な気持ちで話を聞こう。
- ・あいづちや表情で、自分の気持ち（共感や驚きなど）を伝えよう。
- ・知らないことがあるのは当たり前。わからないことはきちんと聞こう。

質問するコツ

トピック	質問例
具体的に質問する	「木を伐る」…この一言から「木の種類は?」「伐る季節は?」「使う道具は?」「地面から何 cm のところを伐る?」など、たくさん聞けることがあるはず。5W1H（いつ、どこで、誰が、何を、どのように、なぜ）をすべて聞こう。
仕事の流れを聞く	作業工程をきちんと押さえましょう。一日の作業内容や、一年の流れを丁寧に聞いていくのもひとつの方法。仕事の全体像を把握しよう。
仕事の背景を聞く	「知っているつもり」にならないで、丁寧に話を聞こう。歴史的な背景や地理的な条件、ひとつひとつの作業の理由なども、詳しく聞く。

確認すべきこと

トピック	質問例
形容詞	「大きい」「高い」「忙しい」などの形容詞が出てきたら要注意。どのくらいの大きさや高さなのか、どのくらい忙しいのか、具体的に聞いてみよう。
専門用語	専門用語やわからない言葉が出てきたら、その言葉の意味や表記（漢字・カタカナなど）を確認しよう。専門用語は、その仕事の特徴や作業上、大切なことを表すことも多い。
固有名詞	道具の名称や人名、地名などの固有名詞が出てきたら、表記を確認しよう。イメージしづらい場合には、実物や写真を見せてもらったり、図やイラストを描いてもらおう。

※話を聞きながら、大切な言葉やわからないことなどをメモしよう。聞き足りなかったことやわからないことは、そのメモを頼りに、話の区切りのよいところで質問しよう。

4. 写真を撮る

インタビューが一段落したら、写真を撮ろう。
写真を撮るときには、以下の項目を押さえよう。



- ・名人の表情がわかる写真
(明るいところで撮影しよう。帽子などをかぶっている場合は、脱いでもらうといい)
- ・仕事場 (名人の作業場)
- ・材料 (仕事で使う材料)
- ・道具 (仕事で使う道具)
- ・完成品 (たとえば家具職人だったら机や椅子、漁師だったら釣った魚など)
- ・仕事の様子 (木を伐採する様子、手元のアップなど)
- ・名人との2ショット (名人のご家族などにカメラを渡して、撮影してもらおう)

5. 取材が終わったら

インタビューが一段落したら、録音ができているか、必ず確認しよう。
(録音できていなかったら、時間が許す限り、もう一度、話を聞こう)

取材を終えて帰宅したら、必ず名人の家に電話をして、取材のお礼と無事に帰宅したことを伝えよう。

✓ 「聞き書き」の書き起こしと編集



1. 書き起こし

録音したお話は、名人の語り口調のまま、一字一句書き起こそう。
書き起こしは時間と手間がかかるけれども、名人に対して理解を深め、どのような作品をつくるのかを考える大切な時間。書き起こしすると、取材のときには聞き流していた大切なことにも、たくさん気づくはず。記憶が新しいうちに作業しよう。
わからないことや聞き取れない部分があったら、2回目の取材のときに質問しよう。

2. 文章整理

自分の質問の部分は削除して、名人の言葉だけで文章をまとめていこう。
質問を消しただけでは意味のわからない文章になる場合があるので、適宜、主語などを補いながら作業しよう。

ポイント

- ・「あのう」「えーと」など、話し言葉独特の言い回しは、適宜削除する。
- ・話があちこちに飛んだり、同じ話が何度も出てくる場合には一つにまとめる。
- ・こそあど言葉(これ、それなどの指示語)は、具体的な名詞や表現に置き換える。

書きこした文章

- Q 「森林組合で働き始めたのは、何歳のときですか？」
A 「えーと、22歳のときです。母はとても喜んでくれました」
Q 「それは良かったですね」
A 「ええ。母は父の…。父は樵(きこり)だったのですが、その姿に、僕を重ねたのかもしれない」



整理した文章の例

私は22歳のときに、森林組合で働き始めました。そのことを母はとても喜んでくれました。樵(きこり)だった父の姿に、僕を重ねたのかもしれない。

3. 文章を入れ替え、削除する

名人の人格や職業をより鮮明に浮かび上がらせるために、不要と思われる内容は、思い切って削除しよう。愚痴や口癖、誰もが語るような一般的な人生論などは削除しよう。その人の人生や生き方にとって、大切なものは何か、伝えたいことは何かをきちんと見極めよう。

ポイント

- ・話の順序は自由に入れ替えて構わない。読者が読みやすいように、論理的に意味が通じるように整理しよう。
- ・作品の構成は、あなたの工夫次第。でも、話の趣旨を曲げない、名人の人格を崩さないように注意しよう。

4. 2回目の取材

聞き足りないところやわからないところを確認しながら、2回目の取材の質問リストを作ろう。

ポイント

- ・5W1H（いつ、どこで、誰が、何を、どのように、なぜ）をきちんと押さえてあるか。専門用語の意味や地名、人名などの表記も確認しよう。
- ・名人の作業工程や季節ごとの仕事内容などを、表にまとめてみるのもひとつの方法。そうすると、きちんと話を聞けていないところや、抜けている箇所がよくわかる。あるいは、名人の略歴を年表にまとめると、何年、何歳のときに、何をしていたかがわかる。それを元に聞き足りないところを質問リストにしよう。

※ 1回目の取材で撮れなかった写真を撮影しよう。「仕事場」「仕事風景」「道具」「材料」「完成品」「名人」「名人との2ショット」のうち、撮れていない、きれいに写っていない写真はなにか。取材内容に応じて、追加で撮影したいものはないか、確認しよう。

※ 1回目と同様に、取材を終えて帰宅した後は、名人に電話をして、取材のお礼と無事に帰宅したことを伝えよう。

※ 2回目の取材についても、記憶が新しいうちに書き起こしと編集に取りかかろう。

✓ 作品の完成

1. 作品の構成

作品は、書き出しが大切だ。作品の冒頭の部分では、名人に関する基本的な情報（氏名、生年月日、年齢、職業、住んでいる場所、家族構成など）を、名人自身の言葉で紹介するように工夫しよう。はじめに、その人がどんな人なのかを、読者が理解できるようにすることが大切。

その上で、子どもの頃の話から、時系列で話をまとめたほうがいいのか。あるいは最近の印象的な出来事から紹介するか。作品の構成（話の展開）はあなた次第。作品の起承転結を考えながら、わかりやすく、読者が興味をもって読みすすめることができるように工夫しよう。



2. 題名と小見出し

最後に、作品にふさわしいタイトル（題名）を考えよう。読者が思わず読みたくなるようなタイトルを考えると同時に、名人の職種などがある程度、想像できるように工夫することが大切。タイトルだけで表現できない場合は、サブタイトルを添えよう。また、文章のまとまり（段落）ごとに、小見出しをつけよう。

3. 作品に必ず書いてほしいこと

- 作品タイトル
- 名人の氏名・職種・住んでいる市町村名
- 自分の名前・正式な学校名・学年
- 取材した年月日
- 引用した資料等の出典情報
- 名人のプロフィール（200字程度）
- 聞き書きを終えての感想（400字程度）

※本文の文字数は、5000字～6000字を目安にまとめよう。

※作品が完成したら、次ページの「聞き書きチェックリスト」で最終確認をしよう。

4. 作品をチェックする

作品が出来上がったら、まず、自分で声を出して読んでみよう。

読みづらいところは、もう一度、文章を読みやすく整理しよう。

その上で、必ず名人に原稿を送り、内容や表記に間違いがないかどうか、チェックしてもらおう。原稿を郵送で送るときは、いつ頃までに返事をいただきたいのかを書き添えて、返信用封筒と一緒に送る。

名人に確認していただく期間は、少なくとも1週間以上、余裕をもとう。

ポイント

聞き書き作品は、名人（話し手）とあなた（聞き手・書き手）の共同作業。最後までお互いの信頼関係を大切にしよう。

✓ 作品のまとめ方

右ページと一緒に見てね。……→

1 読み手を惹きつけるわかりやすいタイトル

漁師になったんは運命やな

うえき こよねひろ (福井県おおい町) × たにばた みき (大阪府立園芸高等学校2年)

2 印象的な小見出し

初めまして

3 基本情報

福井県おおい町大島の上左近米弘です。1939年4月5日生まれで、今年で74歳になります。7人の兄弟がおりまして、中学を卒業して初めて漁業に従事しました。16歳から12年間はよその船の延縄船で乗組員として漁さしてきて、1968年に初めて自分で船をつくって、家内と夫婦舟として約40年間やってきました。息子は3人あって、今、長男は弘伸丸の船長として家内と乗船し、次男は久弘丸の船長として自分と乗船しています。三男は建築業をとりまして、自分たちは手伝い程度の乗組員で、船長は息子たちです。獲るのは主にグジです。グジには赤と白とあるけど、自分らは白アマダイで「若狭ぐじ」って呼ばれるもんです。



上左近さんと次男の久治さんが乗船する「久弘丸」。船の名前は久治さんの名前をとって名付けられた。

7 写真に説明文

跡継ぎをせな
祖先は文禄時代から元々漁師の権利をもっとって、昔からの船を守ってました。ほんで父親も漁師で跡継ぎを

4 主語は統一されている

せんなんことで、中学時代からわかめ採りなんかの手伝いをしとった。大島は本当に漁師が盛んで、自分も海が好きやった。船酔いも絶対にせんかったくらい、ほんでここは1972年まで道路がなくで連絡船が交通の便やった。1日に若狭本郷と小浜行きがあって、これがないとどこにもいけん不便な孤立した場所やったんや。道がなかったら出ていくなで考えられんやろ。そやから跡継ぎ以外考えられへん環境やった。

好きなものこそ上手なれ

12年間、よその船に乗ってたときは大変苦労しました。昔から親の船に乗ると修行にならんからと言えられて、よその船について修行しました。そのときは人間関係に気を使って。しかし好きであったから一生懸命に覚えたんや。好きなものこそ上手なれです。船に積んであった道具をそおと開けて、網の作り方とかを納得いくまで聞いたり見さしてきて、覚えさせてきて。こればかりは、わが身の力だけじゃできひんから。先輩たちは自分の一番の恩師です。今まで亡くなった人の教えと考えが最高の技術で宝物だと思ってます。そら厳しく教えられた、人の先を読む人になれと。でも大切にしてくれたんや。死ぬ際まで名前呼んでくれたり。今でも夢に出てくるくらいに忘れられん大切な人たちです。

漁師という仕事

■自分は海が好きで漁師になったから大変やけど嫌と思つたことは一度もない。他の仕事したいなんて考えたこともないな。自分で作った道具を海に投じて魚がよう釣れたときなんて、ほんまに嬉しい楽しいんや。

5 改行したら必ず全角スペース空け！

作品チェックリスト

✓ 作品の基本

- 名人の「仕事」をテーマとした作品となっているか。(タイトルは、読み手を惹きつけるわかりやすいタイトルにしよう) ……①
- 作品の冒頭に名人の基本情報が書かれているか。……③
(氏名、生年月日、年齢、職業、住んでいる場所、家族構成など)

✓ 作品の構成

- 小見出しが上手につけられたか。(本文の内容を分かりやすく反映しているか) ……②
- 重複する内容は削除し、整理できているか。(何度も同じ話が繰り返されていないか)
- 書き手が理解できていない内容や、不要と思われる情報は削除してあるか。
- 起承転結を押さえた、わかりやすい構成になっているか。

✓ 文章の整理

- ひとつの文章が長すぎないか。(長すぎる場合は、二つ以上の文章に分ける)
- あの、えっと、などの口癖が整理されているか。(多用しないでなるべく削ること)
- それぞれの文章の主語と述語はきちんと対応しているか。
- 改行が正しくされているか。(改行の頭は全角スペース空けること) ……⑤
- 固有名詞(地名や道具名)が正しく表記されているか。……⑥
- 写真や図を使用しているか。また、それらに説明文が入っているか。……⑦
- 5W1Hが押さえられているか。
(いつ、どこで、誰が、何を、どのようにしたのか。それは何故なのか、きちんとわかる文章になっているか)
- こそあと言葉(これ、それなどの指示語)が何を示すか明確になっているか。
- あいまいな表現を、具体的な内容に置き換えられているか。
例)「子どものころ」→昭和30年の小学校3年生のとき
「小さい」→小指の先ほどの小さな
「こういう所」→日当たりの悪い山際の畑

✓ 最終チェック

- 声に出して読んでみて、わかりづらい箇所はないか。
- 誤字、脱字はないか。
- 主語(私、僕など自分を表す言葉)は統一されているか ……④
- 何度も出てくる単語は、表記が統一されているか。
例) シイタケ、椎茸→いずれかの表記に統一すること。
- 話し言葉のかぎかっこ(「」)の中に、句点(。)は入れない。
例)「やっつてごらん」とすすめられました。
- 取材した日にち、出典情報、取材の感想、名人のプロフィールが書かれているか。(本やインターネットの文章、写真などを引用した場合は、必ず出典を明記する)

聞き書きと術

塩野米松流



高校生と「名人」による、1対1の「聞き書き」と、その作品のまとめ方は、「聞き書き甲子園」がはじまった当初から、作家の塩野米松先生に指導をいただいています。「聞き書き」の基本を理解いただくために、その講義の全文を紹介します。

1 『聞き書き』の魅力

通常ではあまり話さない人と深く話せる

皆さんは同世代の人たちとは話をするでしょうか、自分たちの先輩とか、お父さん、おじいさんの世代の人たちと話をすることはなかなかないと思います。僕も自分の親とは話をしづらいいし、ちょっと話しただけでも、なぜかすぐ腹が立ってしまって話を聞くことができない。けれども、よその年上の方から話を聞くと、とくに素直に聞けるものです。

本来、初めて会った人に「お子さんは何人いらっしゃいますか」、「仕事の上でどんな失敗をしたことがありますか」なんていうことは、なかなか聞けるものではないのですが、聞き書きの面白さのひとつは、インタビューという形式をとりながら、初対面の方や世代の違う方にいろいろな話を聞くことができることです。

民俗学の資料に匹敵

『聞き書き』によってまとめた文章は、正確な内容に仕上げると、民俗学の資料としても使えるような価値のあるものにもなります。たとえば職人はみんな同じものを食べたり着たりしているように思われているけれども、それぞれの職業に合った食べ物、着る物、身のこなしがある。こうしたことをひとつずつ正確に聞いて書きとっていくことで、民俗学の資料としても価値のあるものになるのです。

だから、『聞き書き』の作業は、日常に埋もれてしまいがちな、その人の生活や考え、仕事のことなどを聞き出し、正確に書き写す力とその心構えが大切です。

聞き手の人生を反映する文芸

『聞き書き』は「語り」とは違います。「語り」は、こちらが聞かないでも、ずっと一方的に喋っている。「落語」がそれに近い。それを録音して文章に書き起こしても『聞

塩野流 聞き書き術

き書き』とはいわない。これは、小説家が小説を書くのと同じように、語り部が自分の意志だけで自分の人生などを皆さんに話しているのです。

一方、『聞き書き』は相手に質問をして話してもらいますから、そこには聞き手の意志が反映されます。何を聞くか。そして返ってきた答えに対して、次はどういう質問を続けて聞くのか。それによって相手の答えも変わっていきます。だから『聞き書き』でまとめた文章は、一見、話し手の人生のように見えますけれども、実は聞き手の人生も映している文芸形式なのです。

たとえば、同じ人に幾人かの人が『聞き書き』をしたとしても、それぞれの聞き手の個性によってまったく違う『聞き書き』が出来上がります。

皆さんのようにまったくまっさらな状態で行った『聞き書き』は、僕がやる『聞き書き』とはまったく違うと思います。「この人は何も知らないからこういう質問をしているんだろう」「細かな話をしてもわからないかもしれないから、わかりやすく答えておこう」という具合に答えてくださる話も聞き手の要領次第で変わってきます。では、そういう『聞き書き』が素人だから役に立たないかということ、そういうことではありません。皆さんがまとめた『聞き書き』の読者には、皆さんと同じように何も知らない人たちがいます。その何も知らない人に、その人の仕事をどう紹介すればわかりやすいか、という時に、皆さんの率直な質問の方がより有効かもしれないのです。

そして何より、大事なことはこの『聞き書き』を完成させることで、聞き手の皆さんの今の姿がそのまま映った文芸作品ができていくのです。そういう意味で、僕は話を聞く人はリトマス試験紙のようなものだと思っています。年齢の同じ人たちが同じ人に同じようにインタビューをしてまとめても、違うものが出てくるでしょう。それがとても大事なことです。

相手の人生が職業を通じて浮かび上がる

石垣を組む職人さんに石の組み方という「技術」について話を聞いて文章にまとめても、実はなかなか伝わらないのです。もし「技術」だけを記録するのであれば、文章よりも映像（ビデオなど）を使った方がいい。しか

し一方で、彼の「生き方」は「技術」の話を聞くことを通じてでないとなかなか見えてきません。これはどういうことかということ、たとえば、船大工は僕たちから見ればひとつの職業だけれども、彼と彼の家族から見れば「船大工という生き方」なんです。だから船をつくる作業工程を聞く中でその人の職業を知り、その人の「船大工という生き方」を浮かび上がらせていくというのが、実は『聞き書き』の最大の仕事なのです。文字によって、「その人の職業を通じて人生を浮かび上がらせる」という作業を文芸といいます。ここまで『聞き書き』ができあがれば、その作品は文芸と言えます。

さらに、話し言葉で書くので、上手にまとめればとても読みやすく、また、その人の人柄や生まれ育った背景、さらには人生の裏側まで読み取ることができるものに仕上げられるのです。

他のノンフィクションとの違い

人にものを聞いたり、観察して表現していく「ノンフィクション」の形式には、『聞き書き』以外にもいろいろあります。

通常ルポライターと称する人たちは、同じように話を聞きに行き、自分の言葉でまとめます。相手が喋った言葉を使う時にはカギカッコ（「」）を使い、それをつないでいく地の文章は自分の言葉で書きます。カギカッコ（「」）中には、基本的に相手の人が喋った通りの言葉を入れて、嘘をついたり、言い方を変えてはいけなく、というのが「ルポルタージュ」の基本です。しかし、ルポライターは自分の意志と考えをもって、たとえば、その事件の当事者や周囲の人に話を聞いていきます。

基本的な文章のまとめ方は、聞き手であり、ルポライターである彼が、彼の意志で書くというものです。相手の意志や聞き手の意志が文章に表れるという点は『聞き書き』と共通していますが、表現の方法としてはまったく違うものです。

その他、「エッセイ」という形式もあります。日本の場合は、取材した事実を元に、自分の感情を写し取ったような形で文章に表現したものをエッセイと読んでいることが多いようです。

他に「自叙伝」もしくは「伝記」という形式がありま

す。「自叙伝」は自分で書くもの、「伝記」は他の人が調べて書くものです。欧米の伝記作家の場合は、その人の個人的な手紙まで見せてもらったり関係者の証言を集めたり、膨大な資料を元に伝記を書き上げます。

『聞き書き』はこうした方法とは異なったやり方です。相手に話を聞きながら、その話し手の言葉だけで文章をまとめていきます。こういう形式は世界でもなかなか珍しい。

2 『聞き書き』を行う準備

心構え…話し手に心をひらいてもらうために、その人を尊重・尊敬する姿勢を持つ

これから相手の方と初めて会って話す時に何が一番大事かという、まず自分のことをわかってもらうことです。そうしないと、相手は心をひらくことができません。これは普通の会話や人との付き合いでも同じです。相手がどんな人かわからないのでは、話のしようがないのです。

では、自分のことをわかってもらうためにはどうしたらいいのでしょうか。それは、まず相手を尊敬することです。たとえば、その人がおじいさんであれば「その歳までひとつの職業を続けて生きてきた」というそのことだけでもすごいと思いますし、その上、僕のような者に、自分の人生を話してもいいよとさせてくださっていること自体がすごいことだと思うのです。そういう敬意をこめた態度で『聞き書き』に臨むことで、相手の方も心をひらいて話してもいいかなと思ってくれるものなのです。

勉強と準備

①その人のことをよく勉強して知る

話を聞きに行く前には、できるだけ相手のことを知っておくようにします。特にその人の職業についてほとんど初めて聞くことになる場合、たとえば石垣を積む職人さんに話を聞きに行くことになったとします。その場合、「石垣ってどんなものだろう」と図書館やインター

ネットを使って調べる。そうすると、石垣を積むには「ゲンノウ」とか「ノミ」という道具があるとか、その道具は地方によって呼び方も形も違うとか、石を組んで石垣を作ることは、今は法律上規制されていて出来ないから石垣の裏側にコンクリートが塗ってあるとか、いろいろなことが調べた中でわかってくる。たとえ、そういうことだけでも、わかる範囲のことは調べてから話を聞きに行った方がいい。なぜかという、聞き手が何も知らなすぎると、話し手は相手との会話に興味を持たなくなるからです。『聞き書き』の内容も薄っぺらなものになってしまうのです。

②質問を用意していく

皆さんははじめて『聞き書き』をする人がほとんどだと思いますから、質問事項のリストは用意して行った方が良いでしょう。質問事項はいろいろなことを想定しながらつくりまします。自分が文章にまとめるならば、これだけの質問があるというものを考えておきます。

その人が何年生まれで、生まれた環境はどうだったか。その人の仕事はどんな材料を使って、どんなふうにも物を作るのか。または育てるのか。道具は、その技を身につける方法は……。さまざま聞くことがあります。

ただ質問を並べても、相手からの返事が「はい」とか「違います」というだけだと文章にはなりません。できるだけ質問に対して具体的に話してもらわなければならない。

質問事項を考えていきますが、相手の答え次第では、新たな質問を追加しなければなりません。

話をしながらいろいろな事を考え、返事をしてもらった中身に疑問があればすぐにメモをとり、それをまたタイミングよく質問していきます。しかし、上手に聞こうと思ってもなかなか難しいことでしょう。自分のありのままを相手にぶつけて、相手のありのままの答えを引き出す。そのためには、こう聞いてこう答えたら次にこういう質問をしようとか、初めは、ある程度、作戦があるかもしれません。さらに、インタビューの最中に一番困るのは、お互いが黙ってしまうことです。たぶん、相手は何を話したらいいか戸惑っているのでしょう。そのときは相手が話さなくても、聞き手が話をしなければなりません。自分のこと、家庭のこと、学校のこと、祖父母のこと、場を保ち話し手が心をひらきやすくします。こ

うした事態に対応するのはテクニックではなく、皆さんの真摯な態度と一生懸命さです。

録音を確実にを行うための用意

①自分の録音機の確認

録音機の使い方はあらかじめ確認しておきましょう。マイクの向きにも注意をしましょう。ご自身の録音機の使い方や特性をよく知った上で、マイクを置く位置などにも気をつけてください。

②録音できているかどうかを確認する

インタビューが始まってから録音できているかを確認するのは難しいです。事前に自分の声を録音して練習しておきましょう。また、可能であれば、取材の前に試しで録音させてもらい、音が録音されていることを確認してから、話をはじめてみましょう。

③録音は途中で止めない

できるだけ録音しましょう。無駄なようでも二人で話をしている間はずっと録音し続けてください。お茶が出て「まずひと休みしなさいよ」と言われても録音は続ける。この時に録音を止めてしまうと、いつのまにか話に夢中になって、気がついた時には録音していないということがよくあります。また茶飲み話の間や移動中に、大事な話をしてくださることがよくあるのです。

④持ち物リスト

録音機、カメラ、予備バッテリーや充電器、メモ用のノート、筆記用具は必ず用意します。また、仕事場（作業現場など）を見せてくれることもあると思うので、動きやすい服装で行きましょう。

3 まず相手の人に伝えること

- ①『聞き書き』とはどういうものであるかを伝える
- ②録音させてもらうことへの理解を得る
- ③原稿はご本人に確認し、不都合があれば修正・削除できることを伝える

まず皆さんは『聞き書き』をする相手の方の家に伺って、挨拶をしますね。簡単な自己紹介をして、「これか

ら『聞き書き』をさせてください」とお願いします。でも、相手の方は『聞き書き』とはどういうものかを知りません。ですから、『聞き書き』とはどういうものかということを説明しなければなりません。「これからお話しして下さる中身を文章にまとめます。私が質問をして、お話いただいた言葉を書き起こし、それを文章にまとめます」というようなことを、まず説明します。

そして、録音機を出す時に、「申し訳ありませんが、録音させてください」とお願いする。何のことわりもなしに録音するのは相手の方に失礼なことで、ルール違反なのです。また、録音してしまえば、それは自分のもののような気がしますが、そこで話された言葉は相手の方のものです。だから、はじめに相手の方にも、話した言葉がすべて録音されることを覚悟してもらわなければいけない。さらに話す途中で、相手の方は「こんなことまで話していいかな」とためらう場合がありますので、「最後にまとめた原稿をお見せします。もし不都合なところがあれば、あとから削ってくださって結構です」もしくは、「最後に原稿を整理する段階で、ご相談させてください」と言っておきます。こうしたやり取りをきちんとしないと、いずれにしても相手の方に信用されず、本当のことを話してくれないものです。

4 聞く

『聞き書き』は対話でできあがる

『聞き書き』というと、「聞く」という言葉のイメージで、どうしても相手の方に一方的に質問する形式に聞こえますが、実はお互いの「対話」なのです。お茶飲み話の延長で、話をずっと聞いていく。だから相手ももちろん話しますが、僕もただ聞いているだけではなく、話をします。二人で話をしながら対話形式でずっと物語が進行して、時々、話の流れが元に戻ったりしながら、いろいろな話をしていく。人というのは、話をする中でしか思い出さないことがたくさんあるのです。また、話をしているうちに自分の考えがまとまるということがあるのです。皆さんが聞きに行く相手は、答えをはじめから用意して待っているわけではないの

です。皆さんが話しかけることによって答えを見つけたり、「ああ、そういう言い方があるのか。それならこういうふうに言う場合もあるんだよ」というような表現をみつけてくださる。

こちらから話しかけない限り、向こうから答えは返ってきません。自分が話をする事で、相手の言葉を聞き出していき、これが単純なインタビューと違って、『聞き書き』のとても面白いところなのです。

相手の人が当たり前だと思っていることを聞き出す

インターネットや図書館で調べれば、自分が知りたいことはだいたいわかります。けれども、自分が相手の方に質問して、はじめてわかることもあります。僕は、自分で本を書くために『聞き書き』をしますが、その時には、どこの資料にもなかったことを聞くようにしています。本には書いてなくても、その職人さんにとって、それは日常の、当たり前のことだったりもするわけです。

『聞き書き』で大切なのは、相手の方が当たり前だと思っていることを上手に聞き出すことです。自分が今まで本で見た、どの川船の写真よりも、この熊野川の船は変わっている。平たくて、幅が広い。これはなぜなのか。たとえば、そういう質問をします。相手の方にとって自分の船だけが自分の人生ですから、それを当たり前だと思っている。聞き手の事前の勉強による質問を受けない限り、その人自身からは、その疑問に対する答えは出てこないのです。

最初に用意した質問を基本としてさらに相手の話の中から新たな質問を作り出す

「質問事項のリストを用意して行った方がいい」とお話ししました。しかし実際には、その用意した質問だけだったら、30分もかからないうちにインタビューは終わってしまうでしょう。だから聞かなければいけないと思うことをまず基本に置いて、後は相手の答えの中から、その場で質問事項を作り出していくのです。

たとえば、大工さんに「どういうふうにすると、カンナを上手にかけられますか」と質問してみる。「自分

の腰の幅に足を広げるのがいい」とか、「右足を半歩踏み出すのがいい。これがカンナを削るのに一番疲れないやり方だ」という返事が返ってきます。その話を聞いたら、その場で、さらに質問を足します。たとえば、「それは誰に教わったのですか？」と聞いてみる。そうすると「自分のお師匠さんに教わりました。お師匠さんは、自分が前かがみになってカンナを削っていると、必ず箸の柄でひっぱたいた」と話してくれる。その答えを受けて、また次の質問をします。「ひっぱたかれた時、どう思ったのですか」と聞いてみる。「非常に腹が立ったけども、お師匠さんの言うことだから仕方なく、その通りにやった。今までずっとそれでやってきた。だけど、自分が弟子を持つようになって初めてお師匠さんが殴った理由がわかったよ」こういう会話をずっと繰り返していくと、カンナのかけ方を聞きながら、その大工さんの師弟関係がわかるようになります。そして、話を聞くうちに「お師匠さんは別に先生じゃないし、弟子から授業料をもらって教えてるわけじゃない。むしろお師匠さんは弟子に小遣いという形で賃金を払っている。その上、技術を教えてくれている。徒弟制度の中で殴られたり蹴られたりすることは、僕らが思っているほど嫌なことではないのかも知れない」といったことに気づくのです。このようにひとつの動作や技術の中からどれだけの話を聞き出していけるかどうかが、『聞き書き』の大事なところなのです。

このように話すと、とても難しそうに聞こえるかも知れませんが、でも、やってみればわかることです。その人のところに行って、話を聞きながら疑問に思ったことを積み重ねていく。そうすれば、僕が今、説明しているようなことに必ず行き着くのです。

核心に近い部分は聞き方を変えて何度も聞き直す

僕は自分で『聞き書き』をしながら思うのですが、僕がもし刑事であれば供述書も上手にとれるのではないかと思います。『聞き書き』という作業の核心は、尋問調書をとると、たぶん似ているだろうと思うのです。僕が質問をすると相手からは答えが返ってきますが、その答えでは満足できないことがよくあります。

どこか納得できない。そうするとその都度、聞き方を変えて、何度も質問を繰り返しながら、同じことを聞く。そして疑問に思うことが出てくると、また聞く。さっきはこう言ったけれど、自分が今まで読んできた資料ではそんなことは書いていなかったから、もう一度、聞いてみようと思う。何度も聞いて、問題の核心に近い部分を引き出していくのです。

録音機に頼らないでメモをとる疑問はメモに取りタイミングよく質問する

相手の言葉でわからなかった言葉は、次に聞くためにメモをとります。録音機だけに頼ると、だんだん相手の言葉を聞かなくなるものです。そのためにも最初からノートを広げて話をメモしていくのが後々の作業としては一番楽です。書き、メモすることで、相手の言葉をできるだけ頭に記憶した方がいいのです。キーワードを記憶し、次の質問に挟み込むことで、相手の反応も変わってきます。

僕はよく野山を歩きますが、初めて野山を歩いて自然観察する人たちに「カメラは使うな」といいます。それは、写真の中に記憶したものは、自分の頭の中に記憶されているわけではないからです。後で写真を見ればわかるだろうと思うでしょうけれど、自然観察する基本的な力を持ってない人がどこをどう見ればいいのかかわからない状態で写真を見ても、結局それは写っているだけということになってしまう。それだったら、その場でスケッチをした方がいい。メモをとった方がいいのです。

そうすれば、どこから葉が出ているのか、花びらは何枚あるのか、細かなことが見えてくるのです。録音機やカメラといった機械に頼りすぎると、後々にまとめる作業が大変になります。

そうは言っても、実際にインタビューすると相手の話に没頭してメモを怠ったり、「今の話は後でもう一回テープを聞けばいいや」と思うようになってしまうことがあります。そういうことはきっと後悔する原因になります。特に、メモするときに大事なものは、その場で気がついた疑問をメモすることです。そして、その疑問は、相手の話の流れを損なわないように、タイミングよく質問するようにします。

少し高度な技術ですが、後から話の内容を思い出せるならメモを取らないというのが本当は一番いいのです。聞き手は話し手のひとつひとつの動作に注意深く気を使っているのだから、何か話した言葉を僕がメモを取りますと、「あ、そういうことを話せばいいんだ」と向こうは思う。もしくは、「今メモを取ったけど、どういうことでメモを取ったんだろうか」とも思ったりするのです。だから道端で会ったり、お茶を飲みながら話しているように話せるなら、本当はそれが一番いい。そのために、録音機を置いたときも、相手に録音することの了解を得たら、録音しているということではできるだけ忘れてもらうように話をするのが一番望ましい。これもなかなか難しいのですが……。

5 たくさんのわからない言葉

その職業独特の用語は重要話を聞き出すキー（鍵）として活用しどんどん質問していこう

たとえば職人さんに話を聞きますと、わからない言葉がたくさん出てきます。道具の名前、木の種類、ひとつひとつの単位、恐らく皆さんにとってはすべて初めて聞く名前だと思います。それを、ひとつひとつ確認していかなければいけません。

たとえば石工さんの場合でいうと、石を打つためのカナヅチがあって、そのカナヅチに使う「柄」があります。この「柄」は職業によって全部違います。地方によっても違います。自分の体に一番負担がなくて、折れなくて、長持ちして、手になじんで、汗をかいても手から滑り落ちない、そういう木を使います。しかもそれは、自分たちの一番身近にある木でなければいけないのです。遠くから買ったり、道具屋さんに行行って買ってくるようでは、すぐに修理して使えないからです。ですからインタビューでは「その使っている道具の柄は何ですか」と聞いて、その木の名前を覚えて、「なぜその木を使っているのですか」とまた聞く。こうした質問を繰り返していきます。

木には年輪があります。真中の方は赤くて外側は白い。

林業高校とか、農業高校の人たちはそういうことを授業で教わったり、実習で見ているかも知れない。でも普通科の人はそういうことを知らない人が多いと思う。白いところの木を使ってつくる道具、赤いところの木を使ってつくる道具があります。年輪の中心のところは舟には使いませんが、それも質問をすれば答えてくれると思います。「なぜその白いところを使わないんですか」「これは腐りやすいからだ」「じゃあ、なぜ芯の赤いところを使わないんですか」「ひびが入るからです」「では舟はこの部分を使って造るのですか」といった話のやり取りをすることが大切です。

たとえば鍛冶屋さんが刀をつくろうとしているとします。炉の中を覗いて、「これは何度でしょうか」と聞くと、よく勉強をしている鍛冶屋さんは「725度という臨界点がありまして、その温度を超えることを目指しますので、今は725度よりやや上がったところだと思います」という言い方をしてくれる。しかし、これは本来の鍛冶屋さんの言い方ではありません。鍛冶屋さんは炎の色を見て温度を推測している。だから、夕焼けの色ではまだ低くて、もう少し明るく白みがかってきた時には725度を超えているという基準を持っているのです。炎を使う職人たちは計測機器を使うことはまずありません。これは炭焼きも、焼き物屋さんも、皆そうです。その焼き物屋さんが考える温度の基準、それを焼き物屋さんが使う言葉で聞き出せるかどうか、それが『聞き書き』を成功させるコツです。

自分の中の常識や想像を疑う

① 嘘を書かないためにも、具体的にモノを見せてもらって目で確認する

年配の大工さんや石屋さん、桶屋さんは、長さを言うのにセンチとかメートルという単位は使わずに、一尺とか何分といった「尺貫法」を使います。なぜかという、昔から自分の体を物指しにして馴染んだ言い方で、その方が使いやすいからです。

たとえば「2分の釘を使います」という話があったとします。僕らの頭の中では、釘は鉄でできていると思い込んでいるかもしれない。そして、平らな頭のついた釘だといわれたとたんに、普段見る釘を思い浮かべるかも

知れません。でも、実はこれは、鉄の釘ではなくて、竹でつくった釘かもしれません。そういう勘違いはいくらでもあるのです。しかも、舟をつくる時の釘も、宮大工さんが五重塔をつくる時の釘も、僕たちがすぐに思い浮かべる形の鉄の釘は一本も使われません。頭の中でわかったつもりになってしまうと、肝心なことを聞いて確認してくることを忘れてしまう。そうすると、僕たちが「常識」だと思って「はい、はい」と聞いてきたことが、原稿に書き上げた時には「嘘」になってしまうことがあるのです。

また、話の中のでは「あれ」「これ」と言っているあいまいな言葉も、文章にまとめるときには具体的な言葉に置き換えなければなりません。たとえば、目の前に道具を持ってきてもらって話をする時に、相手の方が「この道具はね……」と言ったとします。文章にするときには「この道具」では読者にわかってもらえないので「この」の後に名前をきちっと聞いて、たとえば「このゲンノウは……」に置き換えます。「長さは、こんなもんだな」と言った時にも、ざっと見て30センチであれば「30センチ」と自分のノートにメモしておきます。そして、文章に書く時には具体的な数字を入れる。そういうことにも注意しながら『聞き書き』をしていきます。

そのためにも話の途中で、仕事場や使っている道具、出来上がった品物、材料などは、できるだけ実際に見せていただきましょう。そしてそれをきちんとメモに取り取ります。もちろん写真を撮ってもいいのですが、先ほど言いましたように写真だけでは、見落としてしまうこともあるかもしれないので、きちんとメモにもとります。そして、職人さんそれぞれに呼び方があるので、それをどう呼んでいるのかも聞きます。たとえば、木一本持ってきてそれを使う時に僕たちは根元の方を「根元」、先端を「先端」と普通に言っていますが、職人さんは根元を「モト」、先端のことを「ウラ」と言ったりもします。あるいは「日面」「日裏」という言葉もあります。日が当たる側と日が当たらない側という意味で、それによって木の性質が違うのです。一本の木を使う場合にも、どの部分をどう使うのか。なぜそうするのか。そういうことも、できれば具体的なモノを見せてもらったり、紙に絵を描いてもらうようにします。

② 相手の頭の中にあるモノの形は、絵や図面などを描いてもらって確認する

岡山の舟大工さんに話を聞いたときに、こんなことがありました。ここでは舟をつくるときに、木を合理的に使うため、ねじったような製材の仕方をします。この舟大工さんは設計図も何も描きません。その川に合わせた舟を先祖代々造ってきているのです。だから、長さがいくつの舟が欲しいと言えば、もう彼の頭の中には、「舳先の方はいくつで、真中はいくつで……」という具体的な形が思い描けるのです。だから設計図は書かないのです。でも、僕はその頭の中にあるものをわかりたいから、あえてその設計図を描いてもらえないかと相談しました。ところが彼は今まで設計図を描いたことがないわけですから、立面図だとか平面図という書き方を知らない。そこで代わりに紙を切って、舟の形に貼り合わせ、それを開いたものを僕に渡してくれました。それによって、僕は話に聞いていたことを断然よく理解できました。材のどこがどうねじれているのかも、その紙を見せてもらった時に初めてわかった。同じように、他の方に話を聞いた時に、「ねじって製材をする」ということがわからなかったので、粘土を使って説明してもらったことがあります。相手の話をより理解するためには、絵を描いてもらったり、模型をつくってもらったり、さまざまな工夫が必要です。

よくある困った状況への対応

① 人生論よりも具体的なできごとの積み重ねが重要

相手の方がご自身の「人生論」を語ってくれることもあると思います。でも、「人間というのは、こういうもんだよ」とか、「人が生きるというのはこういうもんだよ」というような、ありきたりの言い方をされても、読者は面白くありません。その言葉の中身を示す具体的なディテールが欲しいのです。

『聞き書き』の基本は、ディテールを積み重ねていくことです。「その人の人生がどうだったか」ということは、ディテールを積み重ねた中で初めてわかるのです。たとえば石工さんのところに行って、なぜ石工さんになったのか、お父さんも石工さんだったのか、誰に仕事を教わっ

たのか、何年教わったのか、最初にやった仕事は何だったか。そういうことを具体的に聞いて、ひとつひとつ積み重ねていく中から、その人の人生が浮かび上がってくるのです。

② お付き合いで聞かざるをえない話もある

『聞き書き』をしていくと、とにかく話は横道にそれます。子ども時代の話を知っているのに、今の話になつたりする。これは仕方ありません。これを聞かないと先に進まないの、とにかく相手の話を聞くのです。そして、しばらく経ってから、「あの、先ほどの、小学校5年生の時のことですが、その時はどうしたんですか？」というように話を何度も戻してあげる。

原稿を仕上げるためには、この話の道筋をたどらなければということをおぼろげにしておかないと、後で原稿をまとめる時にどうしようもなくなります。「小学校5年生の時に、おやじに炭焼き窯に連れて行ってもらった。それが初めて作業を手伝った体験だ」という話があったとします。では、その後、お父さんに何を教えてもらって、どういうふう炭焼きの仕事を覚えて行ったのか、と聞きたいのに、話は横道にそれて、「小学校5年の時は遠足で和歌山に遊びに行き、お城を見た」という話になつたりするのです。あるいは、「隣のおじいちゃんが炭焼きの名人だったんだけど、趣味は将棋でね。その将棋の相手をよくしていたよ」という話になつたりする。話は本題からずれていますから、「その話は結構です」と言いたいところですが、これはお付き合いですから仕方ないのです。相手の話を聞くようにします。そのためにも、録音テープは余分に持っていく必要があります。万が一テープが残り少なくなると、途中から話が上の空になる。それは相手への返事にもすぐに表れます。とにかく我慢して聞いて、しばらくしてから「ありがとうございました。それで、初めてお父さんに炭焼き窯に連れて行ってもらった時の話に戻りますけれども……」と相手の話を誘導します。

③ 本心にせまろう

『聞き書き』には欠点があります。ひとつは、相手の方が本当のことを言っているかどうかわからない、ということ。記憶が曖昧で、年代や地名を間違えることもある。もうひとつは、日本人の場合はほとんどがそうですが、自分のことを誉めることを嫌う、ということ。

す。僕たちがいかにその人を尊敬して彼のすばらしいところを紹介したいと思って話を聞いていても、彼の言葉には自分を謙遜する言葉は出てきても、誉める言葉は出てこない。逆に、「自分が日本一だと思います」というような発言をする人がもし僕のインタビューの対象であれば、僕は途中から彼を尊敬できなくなるかもしれません。「その人の本心にいかに迫るか」ということも、『聞き書き』の面白さのひとつです。

6 たくさんのわからない言葉

『聞き書き』は「文学」という分野ではなくて、「文芸」という一つの、芸を持った仕事だと僕は思っています。その芸とは、まず「話を聞く」こと、それからその「話をまとめること」、この二つです。

では、二つめの「話をまとめる」ことについて説明しましょう。

書き起こしは時間がかかる大仕事

録音の書き起こしは、時間のかかる作業です。録音時間1分で、だいたい原稿用紙1枚の文字数になります。だから1時間、『聞き書き』した録音を起こすと、原稿用紙60枚分になる。僕が1時間で書ける量は5〜6枚。ですから1時間のテープを起こすというのは大変な作業なのです。僕はプロの方に書き起こしを依頼しますが、2時間半のインタビューの録音を午前中に渡して特急で仕上げていただいても、原稿が上がってくるのは翌日の夜8時頃になることもあります。それほど時間がかかるものなのです。話している言葉を文字に書き起こすというのは大変な作業なのです。

話した中身を刈り取る作業＝植木屋さんと同じ作業

書き起こしが終わると、次に文章をまとめます。「小説」の場合は、自分がイメージしたものを作り上げていけばいいのですが、『聞き書き』というのは、相手の方が話したことが基本資料になりますから、皆さんがやる仕事は植木屋さんと同じく刈り取りです。もちろ

ん刈り取った後に、自分の思っている枝を勝手に足すことはできません。だから『聞き書き』は、上手に聞いて、上手に刈り取って、ひとつの文章に仕上げていくという作業です。

❶ いらぬ原稿はすべて消していく

いらぬ原稿はすべて消していきます。話が途中からお天気の話になったり、孫の話になったりした。そこでいらぬと思われるところは削っていけばいい。そうするだけでも、文章の量は少なくなります。

❷ 聞き手の質問はすべて消す

次に、聞き手の質問をすべて消します。そうすると残りは相手の答えだけです。質問を消していく作業をする時に、自分の質問の一部がないと相手の答えの意味が通じなくなるところがあるとします。たとえば「私はこれが大切だと思うのですけれども、大工さんはどう思われますか?」「その通りだと思います」といったやりとりの場合、自分の質問を残しておかないと文章になりません。その時は、大工さんの言葉として「これは大切だと思います」と書きます。また、「どんなノコギリをお使いですか」「刃渡り240ミリでね」というやりとりの質問を削る場合、大工さんの言葉で「ノコギリの話ですが……」とつなげる。そういう作業をしながら、まず質問事項を消していきます。

❸ 「あのう」「～だけど」など癖で繰り返される言葉を削る

話し言葉には「あのう……」とか、「……でね」とか、その人の癖で何度も繰り返される言葉があります。たとえば「そうなんだけど」「これはノミで削ったんだけど」というように、語尾は全部「けど」で終わる癖の人もいます。そういう言葉をすべて文章に残すと、とても読みづらいものになります。この場合は、話し言葉のニュアンスを崩さないように注意しながら、文章をまとめるときに整理し、削っていきます。

文章を変えることはどこまで許されるか?

原則① その人の人格を崩さない

原則② 話の趣旨を曲げない

文章を整理していくと、どこまで変えていいのか、付け加えていいのか、という問題が出てきます。これはとても難しい問題で、一字一句、絶対変えてはいけないとなると、文芸作品、読み物としてはきれいに仕上がってこない。文章を整理するときには「本人の人格を崩さない」、「話の趣旨を曲げない」というのが、まず最低の条件です。その上で、あの人が言いたかった趣旨を考えれば、この言葉に置き換えても決して間違いではないだろう、という範囲で調整していきます。

どの文字を使って表現するか

方言でインタビューに答える人もいます。その時に、「んじゃ」という言葉を使ったとする。「んじゃ」というのを、どう書き起こすか。文字に表すと、「んじゃ」にするべきか、「うんじゃ」とするべきなのか。一個一個の字を起こすたびに考え込みます。それから、「そうですよねえ」と言った時の「え」を残すかどうか。原稿によっては小さいカタカナのエを入れて、それを再現している人もいます。それから「え」を書かずに「ね」で止めてしまう人もいます。話す言葉の音の幅の広さが50音のひらがなにはあてはまらないので、それだけで皆さんは大変な苦勞をすることになります。

もう一つ迷うのは、どこまで漢字で表現していくか、ということ。たとえば秋田の人は、背中を「へなか」と言う。それを漢字で「背中」と書くか、「へなか」と表記するか。ただ「背中」という漢字で原稿を書くと、そのおじいさんは標準語で喋っているようにとられてしまう。そういう原稿は、その時代の風俗や言葉遣いを表現している『聞き書き』として正しいかどうかという問題にぶつかります。あるいは、このおじいさんが喋っていた時にはもっと柔らかい感じに聞こえたのに、自分が書き起こした原稿を読むとぶっきらぼうに感じるのはなぜだろう、という疑問を感じることもあるかも知れません。「へなか」と書くか、「背中」と書くか。あるいは「背中」という漢字に「へなか」というルビをふるか。あるいは注をつけるのか。どういう表記がふさわしいかを考えて、工夫してみてください。

それから、自分自身を指す言葉にもさまざまな言い方があります。「俺」「私」「僕」。そのおじいさんが話す中

で興奮してくると、「わしはな一」といったりする。でも「わし」で通すとおっかないおじいさんのような印象をもたれてしまうかもしれない。その部分だけ「わし」にすればいいか、というと、そうでもありません。文章全体としてはある程度の統一をとりながら、おじいさんの性格を全体としてうまく表現するように言葉を選び、文章を仕上げなければいけない。そういう作業をするたびに、「言葉って何だろうか」と考えてみたりもします。

話のまとめごと、小見出しをつけて整える

ある程度、文章を整えたら、次に話をブロック（ひとつのまとまりのある内容）ごとに整理して、たとえば「ノコギリの話」という付箋を貼るなり小見出しをつけていきます。必ずしも、話の順番通りに文章をまとめるわけではありません。「ノコギリの話」が何回かあって、その話を集めた方が良ければ、一緒にまとめます。「ノコギリの話」と「ノミの話」を比較することでノコギリの鉄の素材がわかる、というような場合には、その二つの話を組み合わせる。そうして、最初に作ったプロット（話の流れ）を修正し、形を整える作業をします。その過程でいらぬ言葉、何度も繰り返されている言葉を削っていきます。

そうして、僕が書いた原稿を本人に見てもらくと、ほとんどの人は、自分が言った通りじゃないか、と思う。でも僕はその人の原稿を仕上げるために、たぶん全体を15分の1か20分の1に削って、最初のインタビューで聞いた話と、5回目ぐらいのインタビューに聞いた話をまとめて、ひとつのブロックにし、センテンス（文章）を仕上げていくわけです。

宮大工の西岡常一棟梁にインタビューして法隆寺の本を作ったときにも、棟梁は全部自分が喋ったままだが書かれていると思ったでしょうけれど、僕は棟梁の話を切ったり貼ったりしながら文章をまとめたのです。はじめのインタビューはもう今から18年ぐらい前だと思いますが、コピー機をそばに置いて一回作った原稿をコピーして、それを切り貼りして、組み合わせる。元の原稿がわからなくなると困るからすべてコピーを取って作業をしました。手で書いて、切ったり貼ったりしていくと、膨大な時間がかかります。でも今はパソコンで処理

できます。パソコンには元のファイルは保存し、コピーしたファイルで何度も修正と上書き処理を繰り返していけば、元の原稿は残しつつ、新しい原稿をつくることができます。

楽しく興味がわくように工夫する
しかも事実のままで

- ① 並べ替え
- ② 頭に物語や事件をおこす
- ③ 面白い小見出し

さて、ここまでできたら、改めて小見出しを1枚の紙に書き並べます。それをどう並べたらその人の人生が浮かび上がってくるだろうか。子どもの時の話から時系列に修行中へとつなげた方がいいだろうか。それとも一番先に親方に怒られて失敗した時の話を持ってこようか。小説でも何でもそうですが、文章の書き出しというのは大切です。のろのろと話を始めてたのでは、読者は読んでくれない。だから最初から事件（印象的なできごと）で、物語を起こす。その事件に関心をもってもらうことで物語を展開していく、というやり方がある。『聞き書き』の文章をまとめる場合にも、そういうやり方があっていいのです。

たとえば石工が石垣を作ったり、ノミ一個で石の形を変えていく作業をどうやってやっていくのか、という話の場合、「30センチ×30センチ×1メートル80センチの石の棒を、一人で作り上げることできたら一人前です」と言われると、「あ、そうかなー」と思う。マタギの人たちの話であれば「獲物をしとめた時には、『あぶらおんけんそわか』と祈ります」と言う、「あ、そういうしきたりがあるのか」と思って、文章を読み始めた時に入りやすくなる。そういう作業は文芸という意味での『聞き書き』でいえばありえるわけです。ですから、どう話の順序を並び替えればインパクトを与えられるか。いかに面白い小見出しをつけられ、読み手を引きずり込んでいけるのか。その人の話を、興味をもって読んでもらえるものに仕上げるといのが、『聞き書き』の最後の仕事です。

聞いてきたことをただ書くだけでは、子どもの宿題と一緒にです。楽しく、興味をもって読んでもらえる、と同時に「事実」でなければいけない。語られる言葉は、その人らしい、その職業の人でなければ使わないだろうという言葉が織り交ぜられ、それでいて大工なら大工という生き方が浮かび上がってくれば、それは大成功です。

7 原稿をその人に戻して確認する

話してもらったことの重さ

「聞き書きの面白さのひとつは、初めてあった方にいろいろな質問をして話を聞けることだ」と初めにお話しました。これはこの職業の特権です。おじいさんおばあさんたちと話を聞いている途中で、「これから先の話は、実は自分の子どもにも女房にもしたことがない」と言って僕に話してくれることがたくさんあるのです。そんな話を、しかも年配の方から聞いていると、まるで「遺言」を聞いているような気にもなります。でも、文章には分量的な制約がありますから、その中身のすべてを僕は書くわけにはいきませんし、話した本人にとっても、それをすべて書いて果たしていいだろうか、という問題もあるのです。ですから、『聞き書き』の場合は、必ず出来上がった原稿を本人に読んでいただきます。ご本人に了承をいただいて初めて、その内容を本にし、出版することができるのです。

8 最後に

『聞き書き』の鉄則は、相手の方に精一杯の敬意を表してお話を聞くこと。これから初めて作業する皆さんには、ですから精一杯の努力で、頑張ってもらいたいと思います。

profile

塩野米松・しおのよねまつ

1947年、秋田県角館町（現仙北市）生まれ。聞き書きの名手で、失われゆく伝統文化・技術の記録に精力的に取り組んでいる。著書に『手業に学べ』『木のいのち・木のこころ』など。



椎茸栽培

黒木さんと椎茸

森をつくる椎茸

聞き手 鈴木美愉
黒木工・神奈川県相模原市
栃木県立宇都宮白楊高等学校2年

自然の神秘

ある時に山に行ってみると、椎茸の胞子が一面に飛んで山の中に霧がかかったようになってね。今までの人生で2、3回ぐらいしか見たことはないけど、それはそれは見事で、めったに味わえない喜びだね。そして春先の最盛期の山、どの木からも椎茸がいっぱい発生している、そういう姿を見るとやってきた生きがいつてのを感じるね。

自己紹介

黒木工。昭和5年6月14日生まれ、87歳を過ぎました。職業は原木椎茸栽培。一昨年前に家内は亡くなり現在は1人で神奈川県相模原市緑区牧野に住んでいます。近所に長男夫婦と孫夫婦、ひ孫が3人います。

出身は宮崎県東臼杵郡南郷村神門、今は東臼杵郡美郷

町 南郷神門。生まれてからしばらくの間は自分の決まった家はなかった。親が炭焼きで生計を立ててたから。山の木を伐採して木炭を製造し、終わるとまた次の山に移動しなくちゃいけない。穴掘って丸太棒を立てて、それに木を渡して結わえ付けて、その上にカヤを雨よけに伏せこんだ小屋で生活してた。

高等科までは行かせてもらった。当時はひどい食糧不足で、戦後はさらに悲惨な状態になり、非農家である私のうちは食料になるものがなくて大変だった。山に生える草も食べた。そんな時おふくろに勧められて椎茸栽培している伯父の所に奉公に行くことになった。それが17歳。

椎茸栽培の道へ

厳しい奉公先で、12年間鍛えられたね。特殊な行事の時は休みもらえたけど、あとは雨が降ろうが雪が降ろうが休めないの。何も自分の自由にはできなくて我慢してやってた。今思えば、よく逃げ出さなかったよ。昔は種駒がない時代だったから、自然に飛んでくる椎茸の胞子を木に付けて栽培をする方式だった。宮崎はこの栽培ができる地域で、農業用耕地のない山の中は、食糧確保と現金収入のためにはどうしても椎茸栽培が切り離すことのできないものだった。

結婚して28歳の時、古い家と山林を少しもらって独立したの。高度経済成長期になり、今まで山の仕事してた人の多くが出稼ぎに出て行き始めた。そんな時、中央高速道路の工事の出稼ぎに行ってる椎茸の仕事の仲間が、帰ってくるたびに「工君、君が好きな椎茸の仕事にいい所、原木に不自由なくて都心に近い非常にいい場所があるよ」「君ならやれるよ。行ってみたらどうだ」「現地視察でもしてみたらどうよ」って言うの。

相模原市への移住 なんだって乗り切れる

忘れもしない昭和43年の9月17日、思い切って現地を見に行ったらわけよ。それから迷って2年思案したの。その時に思ったのは結局思案ばかりしてはいけないということ。後であの時やってみれば良かったって後悔を残すより、今までの経験があればなんだって乗り切れるってそんな気持ちになって。昭和45年にこちら（神奈川）に来ることに決めた。

まず、こういう仕事するには組織作りが大切だと思った。旧藤野町役場の産業課に相談して、藤野町椎茸生産組合っていう組織ができた。そして藤野町林業構造改善の中に椎茸栽培の施設が取り込まれた。昭和55年、初めて本格的な周年栽培ができて年中椎茸が発生できる、なんとか生活ができるような体制が整った。嬉しいもので熱心にそのことをやろうと努力していると協力してくれる人がたくさんいて、それだから基礎ができたのよ。

長年の経験

椎茸の栽培方法っていうのは、原木栽培と菌床栽培があるのね。原木栽培は乾燥用主体に山の中での自然栽培と、主に生食用にハウス内で栽培する方法がある。原木栽培ってのは木を伐って仕込まなければ商売にならない。だいたい1年間に3～4反歩の森林が必要になってくる。最初に植えた苗木の伐期が来るのが18～20年くらい。1回伐って切株から萌芽すればだいたい12～13年でクスギは伐期が来る。ナラは14～15年。

だから毎年一生懸命、植林の計画をする。木を伐るのは16歳の時から仕込まれているから、パーッと一目見れば「あここは椎茸のできる場所だ」とわかる。長年の経験だね。

原木伐採

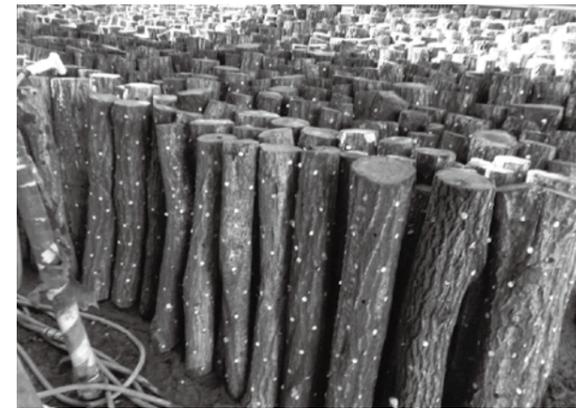
重要なのは木の伐採の時期。三分紅葉の葉っぱが黄色く色づく頃ってのは椎茸を発生させる養分が一番多い。椎茸菌は水分があったら繁殖しないから水分を抜かなきゃいけないの。伐採した後、根っこ側が地面につかないような倒し方をして置いて、太さや場所に合わせて1～2ヵ月ぐらいそのまま寝かせる。伐採した木に葉が付いていると水分調整ができる。葉の付け根にある、小さい玉になってる離層というのが活躍して水分を抜いてくれる。材部が死にかけた時に椎茸菌を植えると菌が中に入っていく。だから伐採時期は、秋の紅葉期の水分の止まった頃が一番いい。

玉切り

水分が取れた時分を見計らって、短く取り扱いのいいように1メートルくらいの長さ切る。玉切りをした原木は5000～10000本できる。

接種（穴あけ・種駒打ち）

梅の花が咲く頃から桜の開花の終わる頃までに植菌っていう作業をする。電動ドリルを使って穴をあけて種駒を打ち込む。真冬の寒い時は菌が動かないし、暑くなってくると菌が弱ってくるから春のこの時期が適している。※接種が終わった原木は「槽木」（ほだぎ）と呼ぶ。



たくさんの槽木

伏せ込み（仮伏せ・本伏せ）

菌を入れたら今度は伏せ込み。場所は厳密に考えないとダメなんだ。椎茸菌は寒さにはある程度強いんだけど暑さには弱い菌。直射日光が当たらない涼しくて排水と風通しのいいところを選んで菌回しをやる。中まで完全に槽化するような状態の条件を付けることが一番大事。山で言えば尾根筋のようなところが最高にいい。そこに仮伏せは1ヵ月くらい。積み上げて覆いをかけて寒さから菌を守り、菌の力を付けたものを今度は本伏せ。15～16ヵ月、鏝伏せや百足伏せという積み方をする。そ



槽場

の上に切った木の枝を置いて日よけをする。そうするといい槽木ができるの。

椎茸の槽づくりは野菜で言えば畑づくりだね。中まで完全に菌を回すことによって木の栄養分を十分に使える。6～7年もの間たくさん椎茸を出してくれるようになる。ただ、菌を回す場所っていうのは1回使ったら少なくとも5年以上休ませないと連作障害のようなものがでるのよ。だから数年先を見越して計画的に場所を選定するの。

※槽木を本伏せした所を「槽場」（ほだば）と言う。



鏝伏せ



百足伏せ



菌が回った槽木

楢起こし（発生）

今度は椎茸を発生させる場所に楢木を移動させる。立木があって木漏れ日のある場所にね。風を抑えるような地形で、湿度を保てるようなところ。移動させる刺激と環境変化の刺激で椎茸が発生して、収量も上がるわけよ。昔は楢場から発生場所まで楢木を背中に背負って運んだもんよ。今は500キロ積んで運べる機械があるから楽になった。発生場所は100年使っても汚染されないから、連作障害は起きないの。自然発生の時期はだいたい9月から3月中旬まで。収穫できるのは10～11月と2～3月。自然栽培はその時期だけなんだ。

なんで原木栽培が干し椎茸に向いてるかっていうと、山の自然の林の中で時間をかけてじっくり育つから。特に味がいい季節は春。2月の上旬か前の年から芽切った（芽を出した）のはじっとそのまま我慢して、春の陽気によって育つ。成長期間が1～1ヵ月半もかかるんだ。寒さにあたって温度差を付けてじわじわと育つのは肉盛りができて、中が十分に固くなってから歩留まりが非常に良くなって味わいが出て来る。

収穫時期ってのも自然に合わせないといけない。雨が



フォワーダ（木を運ぶ機械）

降ると椎茸が水分を吸って開いちゃったりする。水分を含んだ状態で収穫し、乾燥すれば薄っぺらな木の葉のようなものになってしまう。だから天気が2～3日続いている時に収穫して乾燥するってのが干し椎茸のコツ。

ハウスでの原木椎茸栽培

生椎茸は消費者の方が通年求めるのでハウスで栽培している。夏場は楢木を冷たい水に浸し、温度変化の刺激によって人工的に発生させるの。ハウス物は10～11日



ハウス栽培



楢木を浸す水槽

くらいの短期間で成長、収穫するから厚みも締めも味も山の自然のものには及ばない。薄くなっちゃうから干し椎茸には向かない。自然物がない時期にハウス物の生椎茸を出荷する。でもやっぱりハウス物でも原木栽培だから味はいいな。

干し椎茸

形が良いものは丸のまま、他はスライスして乾かすの。椎茸の水分の含有量によって温度が違うんだけど、ぼて



乾燥機の中

ぼてするような水分の多い物はまず室温40度で2時間くらい乾かす。水分がかなり抜けるからそしたら45度、最後に52度くらいまで上げて一昼夜かけて仕上げる。

消費者との繋がり 味で勝負

昭和52年頃からお店に中国産椎茸がずらっと並ぶようになった。日本の業者がどんどん中国産の安い椎茸を仕入れたから。その当時は安全性とか騒がれなかったから、安ければいいっていうことで消費者が中国産に飛びついた。だから原木物は安くしなきゃ売れなくなって採算が合わなくなってきたの。みんなが辞めちゃった原因ね。その時私は、消費者直結で販売することにしていかないと成果が出ないと思った。全国宅配とか色々銘打って、味そのもので勝負しようと思って自家販売に踏み切ったの。それで今は「お宅の椎茸を使いたら他のは使えない」、菌床栽培と比較して食べた人は「やっぱり原木物は味わいがある」と言ってもらえるようになった。

特産物として

以前、全農が中心で神奈川県で採れる特産物の紹介をやったの。そこに椎茸もどうだって誘われてね。私は林業協会のキノコ部の部会長やってたんで、いい機会だから椎茸と神奈川県の宣伝のためにやることになったの。いろいろなキノコをブースで販売。それぞれの生産者がこれぞと思うものを出してそれを審査した。私が出品した椎茸は1個1個にビニールの袋をかけて、山の中で育てたもの。ビニールをかけると寒さ、風を防いで湿度を保つから真冬でもじわじわじわっと育ってくる。普段の2倍ぐらい肉盛りがする凄いもんができて、一等に入ったの。

それで、藤野町の特産品を作ろうということになった。椎茸を入れて、うどんを作ってみたらどうかって。粉にして使ってみたらうまいの。今、農協の直売所で売り出していて、地域でとれた小麦粉とうちの椎茸で作ってるんだ。

「お父さん、椎茸やりたい」

私は長くやってきて大変さはわかっているから、子供には無理に継がせるつもりはなかった。気力、体力、精



店頭並ぶ黒木うどん

神力がそろわないとなかなかできる仕事じゃない。でも、高校卒業したら「ちょっとお父さん、椎茸やってみないんだけど」って言うのよ。「何事にも音を上げず辛抱強く徹底した考えで努力していく気持ちがあるならいいよ」って言って始めたの。

それでも2〜3回くらいはもう辞めるってうちを飛び出したことがある。その時私は「辞めていいよ、いつ辞めたっていいよ」って言った。でも息子は仕事に戻ってきた。今はもう私は手出し、口出ししないで全部息子に任せてる。自分はもう年だしのんびりとね。山は危険なことも多いからそろそろよしたほうがいいと思って。

相手は自然

私は今、後継者育成であちこちの指導をやっている。便利の良いように椎茸栽培に必要な条件を省略したり短縮したりしてやる人がいる。いい畑が作れなければ収量も上がらないし、雑菌だらけになってダメになってしまう。自然の影響を否が応でも受けるのだから、椎茸が生きて成長していく過程の原点をしっかり身に着けて、そのうえで色々なものの力を借りてやるのはいいのよ。

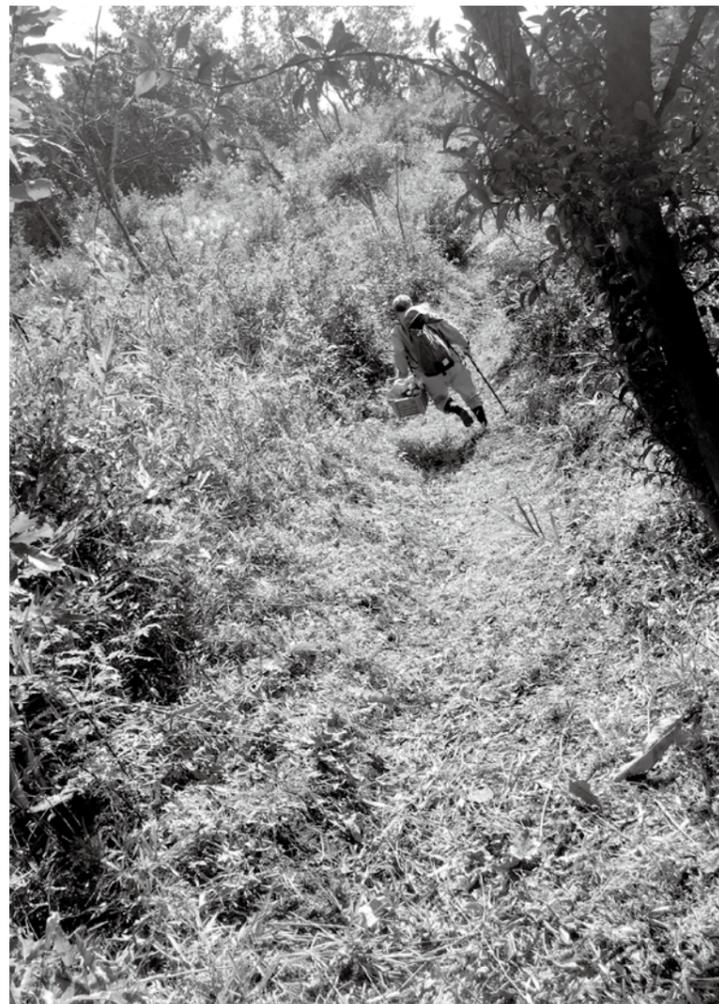
人間の都合だけに合わせて合理化して楽して、手間を抜いてするのは原木栽培ではできない。科学の進歩の力も借りられる部分もあるけれども、生き物だから成長に合わせて絶対に外すことの出来ないポイントは、基本通り労力をかけてやらないとね。やっぱり基本は大事よ。

森のちから 水源確保と災害防止

私が思う森の理想は、常に若い木があり新芽がたくさんあって小さい根っこをいっぱい出して、山をしっかり

支えること。苗を植えて25年以上経つと伐採した後の切株からの萌芽率が3分の1に下がる。50年も経った木はもう萌芽しない。大木になると根は大きくても地肌を覆いつくすような小さなしっかりした根張りがなくなるの。今は昔のように木を利用することがなくなってきているから大木化している。

神奈川県は水源確保のために木を伐ることを制限していて、伐期の来た森でも県が地主に対してあと20年は伐ってはいけない契約をしている。木が大きくなれば葉が沢山できて腐葉土が積もる。そして水分を保持することができるから、県は大きな木があるのが理想だという。でも平らな土地ならまだしも、斜面が20度以上になってくると台風や大雨が来ると大木はゆすられて山が崩壊することは目に見えている。だから将来人間の生命を奪うような災害が起こることも心配。昔の人はそういうことにも知恵を働かせて、薪にし、炭を焼き、常に山を更新させていた。だからしっかりとした若い木が根を張っ



大きな背中

た安全な山だった。もちろん保水も大事だから両方を兼ねた保全をやっていたらいいと思う。

辛抱、努力があったからこそ

今思ってみれば、奉公先で辛抱、努力を積み重ねてきたから、少々なことでは驚かなくなった。金がなかろうが、苦しかろうが、それがあったからこそ、ここへ来てからも何でもやってみようかっていう意欲が湧いた。すんなり育ってたら今のようにやれなかったと思う。一人前になったら、自分の思うようにやろうって思ってたんだな。やり通す自信があると。当時のような惨めな生活をしないでいいのだから、どんなことでも耐えられる。何だってやればできるって思う。

先々の見えない椎茸の仕事より、いつそのこと他の仕事に切り替えたほうがいいのではないかって正直心の迷いが出た時もあった。でも、「これはやっぱり自分が志したことはやってかきやいけないんだな、一つの試練なんだな」と思った。失敗もしながら勉強してきた。この地に腰を据えてよかった、この森で生きてきてよかった。

[取材日：2017年9月10日、11月4日]

【聞き書きを終えての感想】

山道を颯爽と歩く黒木さんは、初めて会う私のことを優しい眼差しで快く受け入れてくださいました。

1回目の取材で大きく太い原木が並んでいるハウスや樽場を見た時は圧倒され、2回目の時には黒木さんに大切に育てられた肉厚で大きく美しい椎茸ができてのを見て、愛おしく思えました。達磨ストーブで焼いた椎茸、天然のなめこも入った贅沢な椎茸のお味噌汁の味は最高で、菌ごたえを思い出すだけで唾液腺が刺激されます。樽木を割って、菌が回って真っ白になっている様子を見せていただきました。学校の微生物の授業でキノコの菌について習ったことを自分の五感を使って感じることができました。

木を伐らないでおくことが自然を守るのではなく、木を伐り更新することが森を守ることに繋がるということを教えていただき、本当に勉強になりました。黒木さんの熱い思いに触れることができたことは私の大切な財産になりました。



採りたてをいただく



幸せなお昼ごはん

profile

黒木 工・くろき たくみ

生年月日：昭和5年6月14日

年齢：87歳

職業：原木椎茸栽培

略歴：出身地である宮崎県の奉公先で椎茸栽培を学び、独立後、神奈川県へ。神奈川県唯一の本格的な干し椎茸生産者。長年藤野町椎茸生産組合長や県林業協会役員、同協会支部の支部長を務めるなど、地域のリーダーとしても活躍。干し椎茸粉末を練り込んだ黒木うどんの開発を行うなど、商品開発にも取り組んでいる。平成22年には第23回特用林産功労者表彰を受賞している。負けん気が強く温厚な人柄で、地域でも人望が厚い。



聞き書きの手引き

2020年3月15日 発行

製作：NPO 法人共存の森ネットワーク（聞き書き甲子園実行委員会事務局）

この冊子は、公益財団法人日本財団の助成により製作しました。

Supported by  日本 THE NIPPON
財団 FOUNDATION

